

# 28年産米の動向について

28年産主食用米の動きに特徴がある。農水省発表の「米に関するマンスリーレポート1月号」によると、平成28/29年（自平成28年7月至平成29年6月末）の期首在庫は204万トン、28年度産の主食用米等の生産量は750万トン、また28/29年産主食用米等需要量の見通しは前年より8万トン低い754万トンとされ、29年6月末の民間在庫量はついに200万トンとなる見通しとなった。さらに、29年産主食用米等の生産数量目標値として735万トン（自主的取組参考値では733万トン）、29年/30年主食用米等需要量見通しは753万トンの設定であることから平成30年6月末民間在庫量は182万トン（自主的取組参考値計算の場合180万トン）と適正在庫水準といわれる200万トンを大きく割り込む見通しとなっている。平成30年は減反政策見直しの初年度であることから、このような需給のタイト見通しは生産側にとって好ましいものといえよう。さて、28年度産米の作況指数は103となり全国的にも作況100を下回った都道府県は2つに留まり（早期栽培を除く）、全国的に豊作となっているものの米価は上昇傾向にある。28年産の各都道府県別の銘柄において出来秋以降のコメの動きに特徴が出ているようだ。特徴として外食・中食用途が主体の業務用で使いやすい、いわゆるB級銘柄の価格の上昇率が高くなっている。栃木県や群馬県で生産されているあさひの夢という品種は同県内産コシヒカ

（次ページへ続く）

## 《平成29/30年の主食用米等の需給見通し》

単位：万トン

平成29年6月末民間在庫	A	200	200
平成29年産主食用米等生産量	B	735※1 (生産数量目標)	733※2 (自主的取組参考値)
平成29/30年主食用米等供給量計	C=A+B	935	933
平成29/30年主食用米等需要量	D	753	753
平成30年6月末民間在庫量	E=C-D	182	180

※1: 生産数量目標: 近年のトレンドとして需要が毎年概ね8万トン減少していることから平成28年産米の生産数量目標743万トンから8万トン控除

※2: 自主的取組参考値: 平成30年6月末民間在庫量が安定供給確保出来る水準(180万トン)となるものとして設定

## 《平成27年産と平成28年産の価格差(相対取引価格上昇幅トップ5)》

単位：円/玄米60kg(税込)

都道府県産名	品種名	平成27年産 (出回り～平成28年8月)	平成28年産 (平成28年12月)	価格差
福島	天のつぶ	10,528	13,410	2,882
栃木	あさひの夢	11,397	13,717	2,320
千葉	ふさおとめ	10,988	13,234	2,246
福島	ひとめぼれ	11,136	13,220	2,084
群馬	あさひの夢	11,923	14,000	2,077

(前ページより続く)

りと価格差は生産者からの現場における取引価格では12月段階で300円あるか、といったような価格差にまで縮まっているようだ。これは多収性である為にあさひの夢がかなり飼料用米に供され、業務用途が品薄となってしまうからだ。B級銘柄の価格帯が上昇すれば安価なものを求めて外国産のコメを利用する動きが出て国内産米の需要減少につながる恐れもあり、最終的には国内生産者に跳ね返ってくることになりかねない。中食や外食等の業務用途は推定で既に300万トン市場となっており、更に拡大する傾向が続くことは間違いない。従って生産者は、多収性の栽培の確立を前提として、中長期的な経営視野のもと取引の安定感の高い業務用途を狙っていくほうが得策であるように思える。

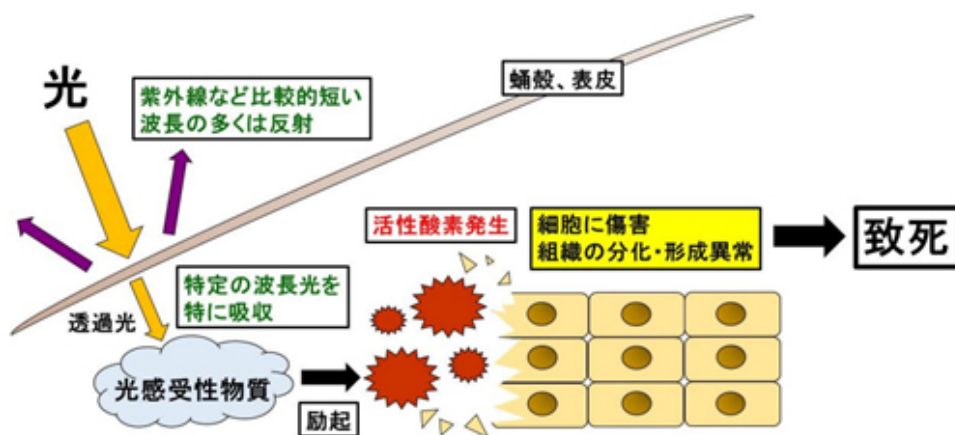
## 青い光で殺虫効果！農業利用に期待がかかる

青い光に殺虫効果があるってご存知ですか？2014年に青色発光ダイオード(LED)の開発で、赤崎勇・名城大終身教授、天野浩・名古屋大教授、中村修二・米カリフォルニア大サンタバーバラ校教授らがノーベル物理学賞を受賞したことがきっかけとなったのか、青色の光に殺虫効果があることが東北大学大学院農学研究科の堀雅敏准教授の研究グループによって明らかにされている。今まで知られていたのは波長が短い紫外線に毒性があるということであったがこれは殺菌効果があるといったもので高等生物である昆虫などが可視光である青色光によって殺虫されるなどは考えにも及ばなかったことであろう。下記の実験ではショウジョウバエの蛹を440nmの青色光で照射したらほぼ死亡した。また467nmの光では卵

や幼虫、成虫も死亡してしまうことが確認された。ショウジョウバエだけでなくチカイエカやヒラタコクヌストモドキのような甲虫に対しても青色光による殺虫効果があることが分かった。昆虫の種類によって波長や強さは異なるようだが青色光により死亡す

ることが分かった。裏を返せば紫外線のような波長が短いほど動物の死亡率が高いという定説は当てはまらないことが立証されたことになる。目からウロコのような話だ。何故、青い光に殺虫効果があるのか？については特定の波長の光が昆虫の内部組織に吸収されると活性酸素が生じて細胞が損傷をうけて死亡するのではないかと推測されている。

まだ推論の域で理論がはっきりしておらずこれからの解明に期待が寄せられているところである。人体や周囲環境に悪影響を及ぼさない青色光はエコな駆除技術として新たに農業の歴史の1ページが刻まれることとなるかもしれない。今後の解明に期待がかかるところだ。



出典：東北大学大学院農学研究科より

暖かかった年末年始から一転して寒波に見舞われ、西日本や日本海側、東北、北海道でも大雪に見舞われました。近年のお天気は程よい加減がなく、極端である傾向がありますが、大雪での影響も早く収まる事を願うばかりです。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>